

かぐらおが

第 62 号

平成元年12月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



写真撮影 第4学年 横山 太範 (写真部)

初冬の常磐公園

経済大国「日本」……………海野 徳二… 2	留学生寄稿……………魏 新榮… 6
想い出のブダベスト……………安田 博… 3	研究室紹介……………生理学第二講座… 6
図書館の電算化とOPAC…………… 4	研究室紹介……………小児科学講座… 7
笹森教授「旭川市文化奨励賞」授賞…………… 5	スキー教室の実施について…………… 7
「公開講座」好評を博し終了…………… 5	図書館の本の返却について…………… 7
体育大会…………… 5	本の寄贈について…………… 8
解剖体慰霊式…………… 5	東医体の成績訂正…………… 8
新入生研修(第2回目)…………… 5	窓 外……………徳中 莊平… 8



経済大国「日本」

海野 徳 二

日本が経済大国であることは誰もが認めるところであろうが、それは必ずしも個人の快適な生活を保障しているものではない。昭和一桁生まれの私は、少年時代を食糧不足で過し、大学卒業後もしばらくは経済小国下で生活した。その頃はそれなりに今よりも良い所も悪い所もあった。思い出を書いてみるからその時代を想像していただきたい。

数年前に偶然 800円の領収証を発見した。大学の受取料だったか入学金だかは忘れてしまったが、国立大学の経費はその程度のものであったのである。授業料は大学院時代でも年 6,000円位だったように記憶している。信じられないような話は、寮費が月 150円であったことである。これはその頃でさえ破格の安さではあったが、国庫に納入したのは 100円、電気・水道料が50円という内訳であった。寮は旧陸軍の木造二階建兵舎で、大部屋の中央をベニヤ板で仕切り、2部屋として使っていた。広さは20畳位はあったろうか。そこに学生が一人づつ住んでいた。余り広過ぎてどうしようもないので、軍隊で使用していた机や椅子をいくつも入れたり、板で更に間仕切りをしたりして、2LDK なみに改造し結構快適な住居としたものである。壁紙を張ったり、芸術味豊かな彩色をしたり、カーテンに凝ったりする者も居て、講義を受けるために留守にするのは勿体ない位であった。授業の出欠もとられなかったから、そのまま実行に移して、4年間の専門課程で出席は〇〇日という仲間もいた筈である（彼は勿論卒業し、国家試験にも合格した）。大学院時代には忙しくなるという理由で病院正門前の下宿屋に引越し、部屋代 1,500円という10倍の出費を強いられることになった。しかし育英会奨学金は月額10,000円であったから、何とか食べていけたし、飲みに行く機会も多少は作ることができた。

学生や若い医師相手の一食60円程度の食堂があった。焼肉定食、焼魚定食、野菜煮込み定食などバラエティーにも富み、ボリュームもたっぷりです、これを1日4食摂っていたら1年間で10kgも肥ってしまい、それ以来この体重を維持し続けている。この食堂のオヤジとは今でも年賀状のやりとりをしている。

昭和40年からアメリカに留学することになったが、その当時は外貨持出し枠は1人 150ドル、家族は50ドルと定められていた。1ドルは 360円で助手の月給は2万円位であったから、150ドルと言っても2ヶ月分の給料を貯えねばならなかったのである。その上、アメリカへの

航空機料金が片道15万円位だったように思う。幸い旅費は在外研究費として文部省が出してくれたが、着いてびっくりしたことには学生用宿舎の保障金が 150ドルもすることであった。これを払ってしまえば生活が出きなくなる。ここは先輩からの借金によって乗り切ることとなった。食事は病院のカフェテリアを主にしたが、1回10ドルはするだろうというようなレストランには絶対に足を向けないことにした。半年後に家族を呼び寄せてアパート暮らしを始めたが、家賃約 100ドル、食料品、電気代、ガス代、電話代、ガソリン代などすべての生活費が 100ないし150ドル、年俸5,000ドルでもそれなりの貯金は可能であり、週末やパケーションには家族を連れての旅行も出かけた。宿泊は車で乗りつけるモーテルであったが、キッチン付きでも家族全体の料金は10ドル程度であった。現在の日本ではとても考えられない話である。

今年6月の学会の帰路に、留学時代に住んでいた所や常々訪問したいと思っていた大学など数ヶ所を廻って来たが、現在の日本の物価の高いことを改めて痛感させられた。例えば日本のホテルの朝食を 2,000円だとすると15ドルに相当する。そんな値段の朝食は1回もなかった。トロントでは竹下元首相も訪れたという高級中華料理店で10人の支払いが酒も入れて約4万円であった。

確かに昔は日本の方が物価は安く、外国に出かけるのは大変なことであった。アメリカでも昔に比べれば物価は上昇しているが日本程ではない。昔でさえ電気、ガス、食料品のような生活必需品は決して高くはなかった。日本では何から何までが高くなってしまった。いかに経済大国と言われようとも給料は素通りしてだけで、生活が豊かになっているのではない。海外への旅行者は年々増えているけれども、持ち切れない位の土産物や免税品を買い込んで帰るグループ旅行も少なくない。海外旅行という名目だけで、本当に楽しんでいるのかと疑わしくなってしまう。日本での生活費は高いから老後は海外で暮そうという宣伝まで出て来て、何とも情ないことである。そんな考えで外国で暮しても、その国に迷惑をかけるだけで楽しい生活になる筈がないではないか。

経済中国位でも十分であるから、気分的に豊かな生活を楽しみたいものである。

(耳鼻咽喉科学講座 教授)



思い出のブダペスト

安田 博

8月19日いよいよ、ブダペスト行きである。ウィーンの西駅にて、9時30分発の特急に乗り込んだ。この列車はウィナーワルツァーというルーマニアのブカレストとスイスのバーゼル間を結ぶ国際特別急行列車である。その経由駅として、オーストリーのウィーン、ハンガリーのブダペスト等があげられる。ウィーンでは、あとブダペスト方面よりの20時15分着があり、上下各一列車だけである。列車は約30分遅れて発車した。約4時間後にブダペスト国際駅東駅に到着した。駅には東海大学の島田氏が迎えに来てくれた。彼は今朝モスクワより空路で一足先にブダペストに来ていたのである。私達4人は一先ず駅のレストランで昼食をとることにした。今夜の宿泊ホテル・サマルクはブダ地区（ブダペストはドナウ川を境にして西側のブダと東側のペストを合せたもの）にあり、東駅よりは相当の距離がある。荷物の関係でタクシーで行くことにした。駅前でタクシーを物色していると、一人の運転手が近寄ってきて行先と人数を問い、500フオリントでどうかと誘ってきた。日本円に換算すると、約1,250円位である。思わず全員賛成でこの車に乗ってしまった。後で判った事であるが、この車はメーターを取り外した悪徳タクシーで、正規の料金はその半分以下である。私達は格好のかもだったのである。さて私達のホテルは、その規模の点で一流だが場所は市の効外である。かってこのホテルで、私達の目的である国際微分幾何学コロキウムが開催された。その当時は近くに殆んど人家が無かったと聞いているが、現在はスーパーマーケットや電車・バスの発着地もできている。

ホテルで一服し落ち着いた所で市内見物に出かけた。始発電車にのり、暫く揺られてエリザベート橋を渡ると、そこはペスト地区である。次は地下鉄に乗ってみた。ヨーロッパで最初に敷かれた地下鉄は、市の中心ブルシュマルティ広場から共和国通り、市立公園、メキシコ通りまでの地下を走っている。新しい地下鉄も何線か敷設されて、その一つはドナウ川の下を抜け南駅に達する。私達はこの線のアストリヤ駅とテーク広場駅間を乗車したのであるが、地下鉄駅が非常に深い所であって、そこに通ずるエスカレーターがかなり急角度で降下してゆくのには、私は恐怖を覚えた。テーク広場でタクシーを拾い、ブダ地区にあるマーチャーシ教会に向った。私は5年前、此処を訪れている。その時はこの教会のすぐ傍まで、車を乗り入れることが出来た。所が此の度は、500m手前のバス停で降りなければならなかった。というのは、教会までの道路

には夥しい人の波がうねっていたからだ。明8月20日はハンガリーの憲法記念日で、今日はその前夜祭である。道路の両側にはぎっしりと露店が並び、日本のお祭の情景を彷彿させる。私達は仮面をつけ、何やらパフォーマンスをする民族踊りを見てから漁夫の砦に向った。これは20世紀初頭に建てられたネオロマネスク様式の砦で、かって漁夫たちがここで王城を守ったという。回廊からの眺望は素晴らしいとされている。残念乍ら今日は曇りで、ドナウ川やペスト地区が霞んでいた。帰りは雨に会ったが、どうやらタクシーでホテルに戻った。

さて、夕食はゆっくり寛いでこのホテルでと思っていたが、朝食しかとれないと云う。近くにレストランもなく、スーパーも閉じていた。やむなく市内で食事をするにして電車に乗った。所がその電車がドナウ川を渡ろうとしない。どうやら行先の違う電車らしい。止むを得ずチエーン橋付近で降り、この橋を渡って対岸に行くことにした。幸いにも橋全体に電灯がともっている。普段は省エネの為消灯しているのだ。夜のドナウ川に、美しいチエーン橋の姿が、くっきりと浮び出ている。対岸に着くと、ブダ地区と対照的に人が多く賑やかであった。私達はホテルのレストランでハンガリー料理を食った。この夜私はなかなか寝付かれなかった。ペランダに出て市の中心の方を眺める。まだ明りは一面に拡がっており、都会の喧噪の地鳴りが遠くから微かに聞えてくる。此処は郊外である。この静かさにほっとする。昨日まで私達はウィーン市の喧噪のど真中に身を晒していたからだ。

翌朝フロントで、デブレツェン大学のタマシー教授、筑波大学、相模工大の河口氏達（兄弟）に会った。この日私達は、目的地エゲールに赴き、論文発表等の仕事を終えて8月25日に再びブダペストに戻ってきた。この夜は、ドナウ川の中の島マルギット島のホテル・ラマダに泊った。翌日妻と私の二人は、ドナウ川のほとりに立つ国会議事堂を訪れた。丁度土曜日で人影は殆んどなく、小雨のそぼ降る中に、ネオゴシック風の壮麗の姿が静かに佇んでいた。この日ウィーンに戻り、帰国の途についたのである。

帰国後、テレビにこの国会議事堂が映し出され、「ハンガリー共和国」が宣言される場面を見た。私の脳裏には、雨の中の議事堂が浮んでくるのである。

（数学 教授）

図書館の電算化とOPAC

1. はじめに

本学の図書館に、平成2年2月図書館システム用電算機が導入されることになった。これは、かねてから文部省へ概算要求書を提出していたもので、ようやく本学も学術情報センターと結んで、文部省の学術情報システム構想への参加が可能となり、平成の幕開けと同時に本学図書館の新なる再生への出発点として印象づけられるものとなるに違いない。

今日まで、図書館では業務の電算処理について幾多の検討を重ねてきた。その結果を電算化基本計画にまとめ、各電算機メーカーと図書館システムの交渉を行い、最終的に機種選定委員会で決定した導入機種は、日本電気のNEC3100/50A シリーズの電算機である。この電算機で運用されるトータルシステムとしてのソフトウェアが、LICSU (Library Information Computer System of University) システムと呼ばれるパッケージソフトである。

2. LICSU について

このシステムは、現在全国の30数大学の国公立の大学図書館で運用されている実績のあるソフトウェアである。数ある図書館システムのなかでも評価の高いシステムで、然もトータルシステム(発注・受入から目録整理を経て貸出まで)として稼働させることのできる唯一のパッケージソフトであると言っても過言ではない。

LICSU は、日本電気と兵庫教育大学図書館との共同開発によって生れたシステムであり、開発主体が国立大学図書館であることと、かつ中小規模大学であることが、本学のような単科大学図書館の導入システムとして適していると思われる。通常システムの開発は、業務の分析から設計に到るまで、長い時間と膨大な経費がかかるものである。幸い過去に苦労しながらシステム開発を行ってきた電算化の先行館があり、そのノウハウを活かしたパッケージソフトを導入することによって図書館の電算化を効率よく発展的に運用できるものであろう。LICSU もそのようなシステムのひとつである。

ここで行われる業務処理は、大きく図書管理、書誌・所蔵管理、雑誌管理、利用者サービスの4つのサブシステムに分けることができる。そしてこれらのサブシステムは、すべて図書・雑誌の目録データベースの形成あるいはそこからの利用と有機的に結ばれているシステムである。その主眼は、利用者への図書・雑誌情報の迅速な提供を目的としている。

3. OPACについて

前述した目録データベースをオンラインで検索して、必要な図書情報を入手する手段を OPAC (Online Public Access Catalog) と呼んでいる。現在のカード目録

や雑誌目録をみるのと同じことで、図書館資料の目録類が、電算機のディスクのなかに取められたと言ってよい。

この OPAC の特徴は、誰でもが自由に利用者端末に向かって、簡単な検索語(キーワード)を入力して、図書情報を知ることができる点にある。現行のカード目録は、正確な書名・著者名及び件名でしか探し得なかったが、OPACではこれらの他に書名の重要語が検索語(最大15文字)として登録されているため、一般的には思いついた単語の組合せで検索できるようになっている。図書館のオンライン情報検索サービスは、文献データベースの知識と特別な研修・訓練が必要であるが、このシステムは、ワープロ操作を知らない利用者でも簡単に扱うことができる。その代わり制限もあり、論理演算が積集合のみで、かつ集合の絞り込みに限定される。また入力できる文字が英数カナ(1バイト)に限られるなど、電算機資源の容量の問題もあるが、利用者がマニュアルを見なくとも、簡単に操作できることが、これらの制限を乗り越えて許容できるものであろう。

4. 今後の課題

OPACは、実際に図書館利用者が利用できるようになるまでには、今少し時間が要る。というのは、導入直後では OPAC で提供できるデータが、電算機のディスクのなかには、図書・雑誌の目録データベースとして何も入っていないからである。OPACが利用するには、すでに本学で受け入れている10万冊近い図書・雑誌のデータを入力しなければならない。このためには、時間と人手と経費が必要になる。図書館では、関係各位のご理解とご協力を得て、少くとも平成2年度内に図書館で所蔵している約3万冊の図書データの入力を行い、その後各研究室に所蔵されている図書を年次計画を立てて、目録データベースの構築を図っていきたいと考えている。

その他、図書館閲覧室に配置される利用者端末は2台に限られるため、将来的には各研究室にあるパソコン等で、内線電話を用いて無手順で図書館の目録データベースにアクセスできるようにしたい。

図書館をめぐる環境は、今大きく変わろうとしている。スタティックな図書館から、文献情報のダイナミズムに応えることのできる情報センターへの転換を求められているのである。このようななかで、図書館は利用者に対して、いかに効率よく、適確に情報を提供できるか、図書館の資料の利用と絡めて、電算機の導入を機会に検証していかなければならないと考える。

(図書課)

笹森教授「旭川市文化奨励賞」授賞

「文化の日」の11月3日、社会学の笹森秀雄教授が旭川医大の開設や市の総合開発計画の策定等、旭川市のまちづくりと活性化のために、多大な貢献をされたとして、旭川市より他2名とともに文化奨励賞を贈られました。

(学生課)



「公開講座」好評を博し終了

本年度の公開講座「病氣とくすり」が10月16日から30日の期間に9回にわたり、実施されました。

本年度は、より市民の皆さんが参加しやすいようにと考え、例年学内で実施していた会場を学外（ニュー北海ホテル）に移し、また、参加定員を220名に増やして計画したところ、市民の関心が高く、定員を大幅に上回る申し込みがあり、会場の都合で247名に制限して開講するほど好評のなか無事終了しました。

(学生課)

講義内容

日	程	講義題目	講師
第1回	10月16日(月)	(1)くすりの歴史 (2)くすりのいろいろな剤形 (3)正しいくすりの使い方	副学長 安孫子 保 附属病院 薬剤部長 稲垣 俊一 薬理学講座 助教授 市原 和夫
第2回	10月18日(水)	胆石とくすり	内科学第二講座 教授 牧野 勲
第3回	10月20日(金)	解熱鎮痛薬	薬理学講座 助教授 市原 和夫
第4回	10月23日(月)	抗生物質	小児科学講座 教授 吉岡 一
第5回	10月24日(火)	鼻アレルギーとくすり	耳鼻咽喉科学講座 教授 海野 徳二
第6回	10月25日(水)	高血圧とくすり	内科学第一講座 教授 小野寺杜吉
第7回	10月26日(木)	動脈硬化とくすり	内科学第三講座 助教授 高杉 佑一
第8回	10月27日(金)	麻薬	麻酔学講座 教授 小川 秀道
第9回	10月30日(月)	胃潰瘍、十二指腸潰瘍とくすり	内科学第三講座 教授 並木 正義

体育大会

学生主催の体育大会が、9月6日(木)に開催された。(一部競技は4～5日の昼休みに予選を行った)。参加学生は学年対抗の各々の種目に熱戦を繰り広げた。結果は次のとおり。

(学生課)

○スポーツ大会結果

	サッカー	バレー	テニス	リレー	綱引き	駅伝	合計	総合
1年	7 (2)	10 (1)	0 キケン	5 (3)	7 (2)	5 (3)	34点	3位
2年	2 (4)	7 (2)	2 (4)	3 (4)	2	3 (4)	19	4位
3年	5 (3)	5 (3)	7 (2)	7 (2)	5 (3)	10 (1)	39	準優勝
4年	0 キケン	2	5 (3)	1 (5)	2	0 キケン	10	5位
5年	10 (1)	2	10 (1)	10 (1)	10 (1)	7 (2)	49	優勝

()は順位

解剖体慰霊式

平成元年度解剖体慰霊式が、9月20日(水)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参加した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた153名(病理解剖64名、法医学解剖59名、系統解剖30名)の方がたの御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。

(学生課)



新入生研修(第2回目)

新入生研修(第2回目)が10月26日(木)・27日(金)・30日(月)・31日(火)に行われました。

第1学年全員を8グループに分け、1日2グループずつ行い、1グループに教授2名(一般教育1名、基礎・臨床1名)が指導にあたり、①前期試験終了後における就学上の諸問題、②学生生活上の諸問題などを中心に研修が行われた。

(学生課)

留学生寄稿

心温まる環境のもとで

魏 新榮



生年月日 1953年5月5日生
所 属 整形外科学講座
在籍期間 1988.10.8～1990.3.31
国 籍 中華人民共和国
資 格 北京中日友好病院
整形外科医師

私は、日本政府国費留学生として1988年10月に旭川へ参りました。この1年間、旭川での生活と大学の仕事において、私は沢山のことを得る事ができました。来日当時私は、日本語は出来ませんでしたし、英語も上手ではありませんでしたので、同僚や家族が、私のことを大変心配しました。しかし、日本の人々は穏やかで礼儀正しく、解らないことがある場合には親切に助言してくれました。日本の先進的科学や技術を学びに日本に来る全ての人々は、きっと様々な障害をこえて彼らの目的を必ずや達成できるものと思います。今までのご親切に対して、沢山のお礼の気持ちを表現できるほど日本語が充分できませんので、旭川医大整形外科の印象を述べて、お礼に代えさせていただきます。日本に着くのが予定より1日早かったため、夜遅く竹光教授に電話をし、後藤先生に札幌まで迎えにきて頂きました。初めからずいぶんとご迷惑をかけてしまいました。竹光先生には、旭川医大のことやこれから住む住居のこと、また生活用品についていろいろ教えて頂いたり、中国料理店、大雪山国立公園に連れて行って頂いたりしました。竹光先生初め、教室の方々、看護婦さんには、日常生活から研究に至るまで本当にいろいろとお世話になりました。日常生活においては、安藤、今井、後藤、宮本先生達が生活用品を沢山提供してくれ、ここで生活に早く慣れるように助けてくれました。特に、安藤先生は時間をさいて日本語、生活上のいろいろのことを教えてくれたり、休日には北海道各地へ連れていってくれました。医局の秘書の皆さんも仕事のうえで大変お世話になっており、深く感謝しています。また仕事の上では、教授から若い先生、看護婦さんまで勉強の意欲に溢れる気風がみられ勉強に、仕事に研究に、有効に時間を使用しています。ことに竹光教授の知識と技術はすばらしく、毎晩夜遅く11時頃まで帰宅せずに仕事をされています。旭川医大整形外科の医療技術は先進的で私にとって学ぶことが沢山あります。特に、頸椎手術、Cotrel-Dubousset, Steffee, 各種の脊柱前・後方手術、術中脊髄機能モニタリング、小児股関節外科、股関節切骨術等は中国においても試みられるべきテクニックと考えます。帰国後は、積極的にこれらの紹介と実現に当たりたいと思います。病院については、明るく、きれいで、整然としており医師と看護婦さんは病人に奉仕するという崇高な目的のために働いており医療側と病人との関係は見事に調和がとれていると思います。私は今まで一度も、不愉快なことは見たことも聞いたこともありません。日本は山や水がきれいであるだけでなく道徳的にも人々はよく、国とし

ても立派であると思います。私はここで学んだ沢山のことを私の国、中国の人たちへのおみやげとして、持って帰りたいと思います。

研究室紹介

■ 生理学第二講座 ■ 坂本 尚志

昭和49年講座開設以来15年、これまで森教授が先頭に立って行われてきた研究に加え、次第に本学の卒業生の若々しい力が研究に注がれるようになってきている。

講座本来の基礎的研究として、森茂美教授(元剣道部)は開講以来これまで中脳ネコ歩行標本を用いて運動の統合機能の解析を続けてきた。現在は化学物質の脳内注入による微小化学刺激法を用い、神経伝達物質という側面から新たな研究を展開している。坂本尚志講師(2期卒・ゴルフ)は留学から帰国し大脳皮質の運動制御に関する新しい研究を進め、同期の太田善博助手(パトミントン)も留学を終え、免疫組織化学を応用した新たな技術を導入している。高草木薫助手(6期・バレー)は電気生理学的手法、および微小化学刺激法を応用し、また同期の松山清治(剣道)(現在山形大学助手)は神経解剖学的手法を用いて脳幹・脊髄神経機構の微細構築を解明してきた。このような研究成果は国際的にも高く評価され、本年9月には国際シンポジウムを旭川で開催した。“日本の旭川”だけでなく“世界の旭川”を目指す森教授の心意気に、国外13名国内16名の超一流の招待研究者および本学20余名の参加を得て、実り多い交流の機会を持つことができたことは記憶に新しい。

一方、臨床生理学的研究としては泌尿器科から宮田昌伸(2期・柔道)が参加し反射性排尿の神経生理学的解析を行った。この研究は菅谷公男元助手(秋田大学)、更にその後任の下田直威助手(秋田大学・テニス)へと受け継がれ現在に至っている。第2外科からは河野透(4期・野球)、紀野修一(5期・ゴルフ)が参加し、現在稲葉聡(7期・ゴルフ)が肝再生における神経系の役割について研究を展開している。整形外科からは熱田裕司(2期・サッカー)が参加し、現在岡哲夫(10期・剣道)により研究が進められている。小児科からの田中肇(9期・野球)は運動機能の生後発達における脳内モノアミン系の役割の解析を進めている。また耳鼻咽喉科からは金谷健史(2期・ゴルフ)、野中聡(3期・剣道)が、第3内科からは奥村利勝(6期・ラグビー)が研究に参加してきた。これら研究に参加してきた卒業生が現在各自の講座で活躍中であることは周知の事であろう。

氏名の後の所属クラブからも判るように多くは運動部出身であり、当教室の根幹である“運動”生理学の面目躍如たるものである。(?)このように森教授の元、日夜多数の若い力が躍動しているのが第二生理学講座である。

なお研究の縁の下の力持ちとなっていたいてきた女性軍は次々と良縁に恵まれ、当教室においても2組のクラブが誕生し、現在教室においても若い佐藤恵事務官が日夜孤軍奮闘していることを強く書き添えたい。

(生理学第二講座 講師)

研究室紹介

■ 小児科学講座 ■ 東 寛

一期生が入局してからはや11年がすぎ現在医局員の数は、総勢70人、そのうち学内は30人となっている。この30人で病院の診療だけでなく旭川周辺の乳児検診、3歳児検診などをひきうけている。同時に臨床研究も精力的かつ着実に行われている。吉岡教授を筆頭とする感染症グループは、小児における抗生剤の効果的な使用法に関する臨床的研究を行っている。加えて、藤田、室野両先生が、ブドウ球菌の産生する各種毒素と疾患との関係を明らかにするユニークな研究を押し進めている。また、坂田先生は、抗生剤の生体に与える影響を研究テーマとし、抗生剤による腸内細菌叢の変化の詳細な検討は、学会で高い評価を受けた。伊藤(真)先生は、吉岡教授の造詣の深い小児の薬物動態を手掛けアスピリン、メチルプレドニン等の薬物動態を研究し、小児の薬物治療学の進歩に貢献している。奥野助教授を中心とする内分泌グループにあっては、矢野先生が尿中に分泌される成長ホルモンを測定しその臨床応用に関し先駆的仕事を行なっている。また、ホルモン分泌の日内変動に着目し、内分泌学的異常の病態の解明に多くの成果を挙げている。岡(敏)先生率いる血液グループは、不治の病とされていた白血病の治療法の進歩を背景に、悪性疾患の治療法の更なる改善を目指している。抗癌剤による治療だけではなく、鈴木(豊)、清水両先生は、骨髄幹細胞培養に着手し病態の解析と骨髄移植による患者の救命に積極的に取り組んでいる。神経グループは、長、沖、伊藤(淳)先生を中心に幅広い臨床活動をおこなひ、最近では、いわゆる自閉症の成因の解明を研究のメインテーマとしている。又、楠先生は、北海道では、ただひとり有機酸分析を手掛け、さまざまな先天代謝異常の早期発見、早期治療に勢力を注いでいる。心臓グループは、岡(隆)、伊藤(真)、土田、そして今年から齊藤先生が加わり、先天性心疾患の早期発見、管理に努め、同時に、不整脈の電気生理学的解析を行っている。最近では、川崎病の病態解明にも積極的に取り組んでいる。新生児担当の角谷先生は、堀山先生の後を引き継ぎ、サーファクタントによる未熟児の呼吸窮迫症の治療など最先端の医療を行っている。最後に、免疫、腎、アレルギーグループ(東、佐々木、上田)は、小児の感染防御機構の特殊性を明らかにしてゆく中で各種疾患における病態の免疫学的なアプローチを行っている。かように様々な専門分野が同居しているわけである。即ち、我が医局は、小児のあらゆる疾患に対処できる医者の育成を目指していると言える。小児を、成長し、やがて成人となる者として考えるとすれば、これは当然の事でもあろう。一方、海外留学生も数を増し、現在は、岡(敏)先生がアメリカ合衆国 Houston, Texas にある M.D. Anderson Cancer Center、伊藤(真)先生が Toronto, Canada の The Hospital For Sick Children に留学中である。

関連病院での研修態勢も充実してきた。旭川厚生病院をはじめ、深川市立総合病院、富良野協会病院、名寄市立総合病院、市立土別総合病院など旭川周辺に新人の研修の場も豊富である。これらの関連病院との連携を密にし、医局の活力をますます盛んにしてゆくことが今後も

必要であり、それが新しい小児科医を模索している我々がいま真に望んでいることである。そこで最後にこの場をかりて、一人でも多くの新人が我が医局に来たらんことを願って終わりとします。

(小児科 助手)

スキー教室の実施について

毎年恒例のスキー教室を、今年も下記の通り実施します。参加を希望する学生は学生課学生係まで申し込んで下さい。

記

1. 期 日 平成元年12月18日(月)～19日(火)
2. 場 所 紋別郡白滝村、北大雪スキー場
3. 参加対象者 学生一般 初級コース } 40名
中級コース }
上級コース }
4. 参加費 5,500円(1泊4食付・傷害保険料・税込み)
5. 締 切 12月11日(月)(定員になり次第締切)
6. そ の 他 詳細については掲示を見ること。

(学生課)



図書館の本の返却について

借出図書の本が返却が遅れるとペナルティが課せられることはご存じですか。

附属図書館の本は本学の教職員・学生であれば誰でも借りることができますが、必ず手続きと冊数、日数の制約があります。これは図書館の本をできるだけ多数の方に公平に使って欲しいという発想の産物です。複本を用意しても利用の重なるときは不足します。少ない予算でさまざまな分野の本を揃える必要もあります。利用できる人が限られないようにするための制約です。

返却が遅れますと、遅れた日数の倍の日数が実際に返した日から貸出停止になります。貸出停止を受けた方は他の利用者へのお詫びとお考えになって、次回からは期日までに返却されるようお願いいたします。

(図書課)



本の寄贈について

去る8月22日に自動車事故で死亡した第1学年学生、久保統裕君の父親久保信彦氏から本学に多大なるご寄付をいただき、その用途について関係者で種々検討した結果、図書を購入することとなり、学生会からの要望もあることから一般図書（講談社発行のブルーボックス）を選定することとしました。整理が済み次第順次附属図書館2階閲覧室の「ブラウジングコーナー」に配架しますのでご利用ください。

（図書課）

東医体の成績訂正

前回発行の61号に掲載した成績に一部誤りがありましたので訂正するとともに関係団体に深くお詫びいたします。

準硬式野球部		→	ベスト8
硬式庭球部男子	1回戦	→	ベスト8
女子	1回戦	→	ベスト8
サッカー部	1回戦	→	2回戦
空手道部	1回戦	→	決勝トーナメント1回戦

（学生課）

窓外



徳中 荘平

有酸素運動のすすめ

この夏のある土曜日の夜、私たちの教室の Dr. F が腰痛のため救急車で7階西病棟に入院しました。Dr. F は医局で一番ゴルフが上手でスコアも80台でラウンドする男です。その日の午後、旭川郊外の某ゴルフ場でラウンド中にはじめて痛みがでて、夜には焼け火箸で刺されたような激痛となり身動きも出来なくなったようです。婦長さん、病棟諸嬢の「手厚い看護」、教授、同僚医師の「温かいはげまし」をうけ、幸いに、Dr. F は手術をうけることなく、鎮痛剤の投与、脊椎の牽引などの保存的療法だけで数日間入院しただけで退院出来ました。その日のラウンドが彼の今シーズンの最後のゴルフになりました。

このようなエピソードは Dr. F ばかりでなく、身近でも、よく耳にします。慢性的な腰痛（low back pain）で悩んでいる人は非常に多く、一般の雑誌にも時々特集が組まれていたりしますが、腰痛症は、動物には無く、常に、立位姿勢をとって脊椎に無理をかけている人間の宿命であると言われていました。

本学にも腰痛で悩まれている方がおられると思います。今年4月に本学トレーニングルームに備え付けられたニュートンベッドをご紹介します。この装置は、一見、普通の腹筋台のように見えます。実際、よく運動部の学生諸君が腹筋台と間違えて、この台の上で腹筋運動をしているのを見かけます。この台は、足首を固定して、電動で台を直立させて体を逆さ吊りにします。自分の上半

身の体重を利用して脊椎をまっすぐに伸ばします。椎間板を引き伸ばし、腰痛症を改善することを目的とした専用の装置です。私も使ってみました。朝夕2回数分間、逆さ吊りになるとめっぽう体調がよようです。何らかの理由で突然に電源が切れても自動的に台が水平にもどりますので安心です。一度お試しになったらいかがでしょうか。

ニュートンベッドのカタログに書かれていましたが、未開人は、狩猟採集のために1日に20-30kmも歩き回り、腰痛とは無縁であったものが、現代生活では、デスクワークなどで長時間一定の姿勢をとり続けなければならず、無理がたたって早い人では、30才代から腰痛が出現するようになりました。

私も、以前はジョッキングや、ウエートトレーニングをよくやりましたが、本学に来た昭和58年頃には中断していました。数年前から、ウエートトレーニングとくにスクワットの後遺症と思われる座骨神経痛になり、一時は毎日ポンタールを服用していたほどです。ところが、昨年からは止めていたジョッキングを再開し、毎日、約10kmのランを行なってみたところ、ほとんど痛みを感じなくなりました。体重も？kg減って体が非常に楽になりました。

人間の体も本来、他の野性動物と同じで、常に腹をすかし、食料を得るために1日に何10kmも歩きあるいは走り回り、たまに食料が手に入ると腹いっぱい食べて脂肪組織として体に貯蔵し飢餓にそなえるように出来ています。1日中体をあまり動かさないデスクワークをして腹いっぱい3度の食事をするのは、体にとって大変、異常な状態で、肥満、腰痛を生ずるのはしごく当然と思われ。大変面倒くさいことですが、毎日、健康に仕事や生活をエンジョイするためには、何らかの有酸素運動（歩行、ラン、スイム、自転車）は不可欠と思うこのごろです。

（泌尿器科学講座 助教授）